



## よいもの、よい循環、 答えは産地のなかに。 奥順がつむぐ新しいコミュニティ。

### 奥順株式会社

#### よいものを 産地とともに

結城紬は、真綿を手でつむいだ糸で織る絹織物だ。ルーツは古代まで遡るその織物は、紬織の原型を今に残し、江戸から明治・昭和と愛され続け、技術が成熟した最盛期には産地全体で5万反の生産を誇ったという。

奥順株式会社は、そんな結城紬のデザインから販売までを手がけている産地問屋だ。「これはよいものだと思うものって誰も一致すると思うんです」と話す専務の奥澤さんの言葉通り、古来より受け継がれてきた真の美を追求する奥順の商品には、みな説得力がある。

商品企画のほとんどを社内にあるデザイン室が行っている奥順のものづくりに、産地の声は欠くことのできない要素だ。生産者が何を感じ、どんな思いを持っているのかを近くに感じながら商品をつくることのできるのは産地にあることの魅力のひとつであり、奥順の商品の大きな強みでもある。

「ものがあってはじめて商売が生まれるので、機屋（はたや）さんを大切にするという思いは社員に共通しています」奥澤さんは続ける。そう答えるのには、ユネスコ文化遺産に登録されても、生産者がそれ一本で食べて行くことができないという地域の現状がある。

#### 会社情報

奥順株式会社 創業/明治40年 資本金/60,000,000円 従業員/38名(正社員)その他 従業員10名  
代表者代表取締役社長/奥澤武治(H25.3) 本社/〒307-0001 茨城県結城市大字結城12-2 Tel.0296-33-3111  
事業所/湯通し工場:茨城県結城市逆井11388番地、つむぎの館:茨城県結城市結城12番地  
(財)日本博物館協会加盟 本場結城紬染織資料館『手緒里』

#### 新しい流通 新たなコミュニティをつくりたい

着物を着る人はどんどん減る。結城紬の流通量も地域の機屋さんの数も減った。それでも地域への眼差しは暖かい。今だからこそできる物の動かし方があると信じている。奥順では、現在取引のある30~40軒の機屋すべてを一軒ずつ訪問しているという。そこで交わされるのは業界の課題についてや、ものづくりについて。アイデアをもらうことも、助言をすることもある。

紬の最盛期、年間5万反をめまぐるしく流通させていた時代からは考えられないことだが、よいものをつくる地域の生産者が無くては、会社も地域の経済も回らない。生産者と問屋・小売の新しい利益の分配方法も今変革の取り組みの中にある。

奥澤さんは言う「新しい循環をつくるコミュニティを自分たちで形成していきたいです」これは産地で声を聞いてきた小さな会社にしかできないことだ。

「ちゃんとよいものをつくっていきたい」。

奥澤さんに、これからの奥順のあり方について尋ねたときに返って来た答えは、自分自身に言い聞かせているようだった。眼差しの先に見据えているのは、奥順と産地とお客様のなかで、良いものが作られ、経済がきちんと回る地域の姿かもしれない。

ことばを紡ぐゼミ

仕事の作り方を体感するライティングゼミ